

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

## テキスト 1

### 『ワンダーランド』

大きな白い翼が真っ青な空へ吸い込まれていく。その翼に運ばれているのは、高校時代からの親友だった。

「いつか海外へ行く」

それが彼の口癖で、いつも真剣な目をして語っていた。そして今日、彼は言葉通りに動き出したのだった。夢へ向かって大きく一步を踏み出したのだ。僕は見上げた視線をなかなか下ろすことができずにいた。

心から彼のことを応援しているし、誇らしくも思っている。けれど、僕の胸にぽっかりと穴が空いてしまったのは事実だった。そして、その穴の大きさや深さがまったく想像できないことが不安でもあった。自分が思っているよりもずっと巨大で、底が見えないほどの穴であったならどうしようか……。

西の方から海風が吹きつけ、全身を撫でるように通り過ぎていく。その風に乗って微かに声を聞いたような気がした。

「覗いてみるか？」

「——え？」

「おれが穴に案内してやろうかと言っているんだ」

僕はぽかんと口を開けたまま、周囲に目を走らせた。しかし、この展望デッキには僕他に誰もいない。

「穴の中を覗いてみたいんだろ？」

声は足もとから届いてくる。ゆっくりと顔を下に向けると、そこには一匹の白いウサギが綺麗に前足を揃えて座っていた。僕はわけがわからないまま、じっとウサギを見つめ返した。

「ついてこい」

ウサギはそう言って、ぴよんぴよん跳ね出す。まるで僕のはいている白いスニーカーが飛び回っているようにも見えた。

まさか——ふと僕の頭によぎったのはあの本だった。ウサギのあとを追って不思議の国へ迷い込んでしまった少女——。

「おい、早く」

ウサギがこちらを向き、焦れったように鼻を高く持ち上げていた。目の前で起きていることがよく理解できなかったが、白いウサギがこうして僕に話しかけているのは間違いな

かった。

「ほら、ここだ」

展望デッキの南の角だった。板張りの地面の隅に小さな穴が空いていた。僕は床板に片膝をつき、そっと中を覗き込んだ。

真下に向かってごつごつした穴がのびていた。土の匂いがする。入り組んだ巣でもあるのかと思ったが、枝分かれはしておらず、さほど深くもないようだった。

頭上から太陽が降り注ぎ、その光に照らされて穴の底に何かが見えた。

一足の革靴だった。

「これは……」

その靴はずいぶん歪だった。縫い目がほどけていたり、革が余ったままになっていたり、靴としてまだ形を成していなかった。作っている途中なのだろうか。

と——中底にくすんだ〈R〉（アール）の文字が見えた。少し右上がりの手書きのサイン。

……あいつの字だ。僕は思った。そうか……これはあいつが作っている靴なのか。海の向こうで学びながら作っている靴なのか……。

親友は今日、革靴の職人になるために旅立ったのだ。

「この穴は不思議の国というより、未来へと続いているんだな」

ウサギは何も答えなかった。つぶらな瞳で僕を見上げるだけだった。

「なあ、この穴、埋めないでおいてくれないか。また覗きにくる。あいつに会うために」

ウサギはその場で一度だけぴょんと跳ねた。

ウサギはもう喋らなかった。

(了)